

山家集

新院讃岐におはしましけるに、便に付けて女房の許より

水茎の書き流すべき方ぞなき

心のうちは汲みて知らなん

崇徳院

かへし

ほど遠み通ふ心の行くばかり

猶書き流せ水茎の跡

西行

又女房つかはしける

いとどしく憂きにつけても頼むかな

契りし道の案内違ふな

崇徳院

かかりける涙に沈む身の憂さを

君ならで又誰か浮べん

崇徳院

かへし

頼むらん案内しるべもいさや一つ世の

別にだにも迷ふ心は

西行

流れ出づる涙に今日は沈むとも

浮かばん末を猶思はなむ

* * *

世の中に大事出で来て、新院あらぬ様にならせおはしまして、御髪^{ぐみ}おろして仁和寺の北院におはしましけるに、参りて源賢阿闍梨出で逢ひたり。月明くてよみける

かかる世に影もかはらず澄む月を

見る我身さへ恨めしき哉

* * *

讃岐へおはしまして後、歌と云ふことの世にいと聞えざりければ、寂然が許へ言ひつかはしける

言の葉の情絶えにし折節に

あり逢ふ身こそ悲しかりけれ

かへし

寂然

敷島や絶えぬる道になくくも

君とのみこそ跡を偲ばめ

*

*

*

讃岐にて御心引きかへて、後の世の事御勤め隙なくせ
させおはしますと聞きて、女房の許へ申しける。此文
を書きて若人不嗔打以何修忍辱

西行

世の中をそむく便やなからまし

憂き折節に君が逢はずば

これもついでに具して参らせける

西行

浅ましやいかなる故の報にて

かかる事もある世なるらん

西行

存命ながらへて遂に住むべき都かは

此世はよしやとてかくても

西行

幻まぼろしの夢を現に見る人は

目も合せてや世をあかすらん

かくて後人のまゐりけるに

西行

其の日より落つる涙を形見にて

思ひ忘るる時の間ぞなき

かへし

崇徳院

眼の前に変り果てにし世の憂きに

涙を君も流しける哉

崇徳院

松山の涙は海に深くなりて

蓮はちすの池に入れよとぞ思ふ

崇徳院

波の立つ心の水をしづめつつ

咲かん蓮を今は待つかな

*

*

*

讃岐に詣で、松山と申す所に、院おはしましけん古跡

尋ねけれども、形もなかりければ

西行

松山の波に流れて来し舟の

やがて空しく成りにけるかな

西行

松山の波の気色は変らじを

形かたなく君はなりましにけり

白峯と申す所に御墓の侍りけるに参りて

西行

よしや君昔の玉の床とても

かからん後は何にかはせん